

# 黒土館跡

## 発掘調査報告書(2)

1997-3

秋田県鹿角市教育委員会

## 序

近年、大規模な発掘調査により、遺跡の全体像がひとめでわかるようになり、これまで私たちが描いてきた歴史観を大きくかえるような事実が毎日のように目に入ってきます。そして、昨年是全国のいたるところで空前の「遺跡ブーム」が沸き起こりました。人々の歴史への関心がこれまで以上に高まるなか、改めて文化財保護行政の重要性を再認識しております。

鹿角市でも、特別史跡大湯環状列石をはじめとする発掘調査も増え、当市がたどってきた歴史の一幕が見えはじめてきました。

本書は、急傾斜地崩壊防止事業に伴って一部分を消失する、鹿角四十二館の一つ、黒土館跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

古文書等史料の少ない鹿角市ではありますが、調査成果をとおして館跡をとりまく歴史的背景の謎を解く手助けとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力くださいました関係機関・各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成9年3月



鹿角市教育委員会

教育長 浅利 忠

## 例 言

- 1 本報告書は、秋田県鹿角市花輪字下タ町、字陣場に所在する黒土館跡の調査成果をまとめたものである。
- 2 報告書の執筆は、調査員である藤井安正、花海義人が分担した。第Ⅰ章「黒土館跡の立地と現況」については、『鹿角の館5』より転載した。
- 3 資料の鑑定については、下記の方々に依頼し、協力を得た。

陶磁器鑑定 青森県浪岡町史編纂室 主査 工藤清泰  
石器等鑑定 秋田県立十和田高等学校 教諭 鎌田健一
- 4 土層・土器等の色彩については『新版標準土色帖』（日本色彩研究所）を使用した。
- 5 報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の「花輪」（S:1/2.5千）を使用した。
- 6 遺物の整理・報告書作成の一連の作業は、調査員の指導のもとに、調査補助員・作業員が行なった。
- 7 報告書に記載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。
- 8 報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように務めたが、繰り返し使用される用語については、簡略しているものもある。
- 9 図版等で下記のような記号、スクリーン・トーンを使用した。

SD……………空堀・縦堀  
…確認面以下の土層 …空堀・沢
- 10 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の方々よりご指導・ご助言をいただいた。

記して、感謝の意を表します。（敬称略・順不同）  
高橋 忠彦、栗沢 光男、高橋 学（秋田県埋蔵文化財センター）  
板橋 範芳（大館市教育委員会）  
高木 晃（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

# 本文目次

序

例言

本文目次

図版・表・写真図版目次

## 第Ⅰ章 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺の館跡 ..... 1
2. 黒土館跡の歴史的背景 ..... 2
3. 黒土館跡の立地と現況 ..... 2
4. 遺跡の層序 ..... 7

## 第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至までの経過 ..... 9
2. 調査要項 ..... 9
3. 調査の方法 ..... 10
4. 調査の経過 ..... 10

## 第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 帯郭と検出遺構 ..... 11
2. 出土遺物 ..... 14
  - (1) 陶磁器 ..... 14
  - (2) 鉄製品・古銭 ..... 14
  - (3) 縄文土器 ..... 16
  - (4) 石器・土製品・石製品 ..... 16

## 第Ⅳ章 調査のまとめ ..... 21

参考文献

報告書抄録

## 図版・表・写真図版目次

### 図版目次

第1図	黒土館跡の位置	1
第2図	黒土館跡現状図	5
第3図	基本層図・空掘土層図	8
第4図	各期遺構配置図	12
第5図	各期遺構配置図	13
第6図	I帯郭縦掘平面図・土層図	14
第7図	出土遺物(1)	15
第8図	出土遺物(2)	16
第9図	出土遺物(3)	17
第10図	出土遺物(4)	18
第11図	出土遺物(5)	19
第12図	出土遺物(6)	21

### 写真図版目次

PL1	黒土館跡全景	6
PL2	黒土館跡全景・調査区全景	24
PL3	調査区全景	25
PL4	出土遺物(1)	26
PL5	出土遺物(2)	27

# 第I章 遺跡の環境

## 1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

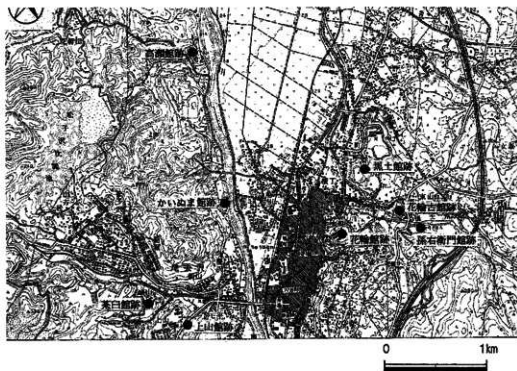
秋田県の北の玄関口である鹿角市は、十和田・八幡平両国立公園にはさまれた自然豊かな環境にあります。また、岩手県、青森県の両県境に位置し、地理的、自然的な好条件のもと、縄文時代から近世にかけての多くの遺跡が、市内に至る所に分布しています。

また、市内には、米代川を本流とし、大小様々な支流が米代川に流れ込み、これらによって形成された標高150～180mの河岸段丘・舌状台地が山脈・山地の裾野に発達しています。この複雑な地形を利用し、数多くの館跡がつくられています。

本調査地である黒土館跡もその一つで、西流する富士川の右岸台地、花輪市街地の北東端にあります。

周辺の館跡では、東側500mに花輪古館跡、南東750mに孫右衛門館跡、南650mには近世の花輪館跡が開いている。また、米代川を挟んだ西側対岸には、かいぬま館跡、高瀬館跡等が一望できる。なお、本館跡郭上面の北東端には館を区切る空堀を挟んで、縄文時代中期の大集落「天戸森遺跡」があります。

本年度は黒土館跡第Ⅶ郭東側斜面を調査しました。



第1図 黒土館跡の位置

## 2. 黒土館の歴史的背景

黒土館の歴史的背景については、昨年度調査時の鹿角市文化財調査史料57「黒土館発掘調査報告書」・同史料30「鹿角の館」の「黒土館跡」を参考されたい。

## 3. 立地と現況

黒土館の立地と現況については、鹿角市文化財調査史料30「館跡航空写真測量調査報告書 鹿角の館」の「黒土館跡」の「黒土館の立地と現況」を再録した。

黒土館は西流する富士川の右岸台地（字陳場、以後陳場台とする）西縁の「イワの上」と通称される西南隅付近を中心とする東西400m、南北370mの範囲に構築されている。館跡の西縁から館跡内部に大きな沢が入り込み、この沢の両側に計7個の郭が構築されている。

花輪盆地の中央の低地に臨む陳場台は西へ行くほど周辺低地との比高を増している。黒土館とその西裾に広がる下夕町（地名の由来が黒土館にあると言われる）との比高は約33mである展望にすぐれ、館跡上からは富士川の対岸に位置する花輪館を初めとし、米代川左岸の、南から尾去、上山、茶臼、高瀬、高屋の各館や北方の小坂、毛馬内、小枝指、新斗米方面が一望できる。

富士川は、その昔は、現在より南側、川原町付近を流れていたといわれている。富士川は、その上流（花輪スキー場下流付近）に於いて、富士岡を分流させ、この分流が陳場台の東側～北側にかけての低地を流れていたことが天文4年（1739）の絵図に描かれており、富士の地名を今に残している。

館跡の南裾を洗う富士川によって、南側斜面は遺構の跡を留めないほど崩壊が著しい。また急傾斜地災害防止工事による破壊も進んでいる。昭和59、60年には急傾斜地災害防止工事によって、Ⅰ郭の西側に85mにわたって認められた土塁がほとんど消失してしまった。

第Ⅰ郭（上部平坦地、南北185m×東西110m、以後数値のみ記す）

「イワの上」と呼ばれるⅠ郭は、黒土館の西南端に位置する。南東に位置するⅡ郭とは空堀によって、また北東のⅥ、Ⅶ郭とは大きな沢によって截れている。本郭の南側は断崖絶壁となっており、31m下を流れる富士川と急傾斜地災害防止工事による破壊が著しい。

郭上面は平坦で、南側半分は畑地・果樹園となっている。また北側部分は、山林・原野となっており、昔、地藏石(?)が出土したと伝えられている。東縁部中央付近に通路跡と思われる平場（緩斜面）が下方の帯郭・空堀の通じている。

Ⅰ郭は、郭上面がⅡ・Ⅲ郭のレベルより低いのが気になるが、規模、周囲の防禦施設の堅固さからみて、黒土館の主郭と考えられる。

I郭南西端より6m下に小さな平場が残っている。かつてこの付近にも大きな平場があったが、土取りにより消滅したらしい。土取り作業中に出土した鏡が斜面上に彫られている。

I郭の北側から西側にかけては、空堀を隔てて小郭(V郭)、土塁、土塁状小丘が一連するI郭の北側、V郭との間には土塁状の盛土(?)がみられ、この北側(V郭との間)にはカギ形に折れ曲がる空堀がある。明らかに人為的な構築であり、存立期における出入口の一つと考えられる。

I郭の北西に位置する土塁状小丘(細長い平場)の南端には稻荷神を祀った小さな石の祠がある。その南下にはI郭周囲を巡る空堀・平場より一段低い盛地があり、さらに段をもって西下の黒土稻荷神社のある平場へと続く。この部分が自然地形なのか、人為的なものかは踏査で確認できなかった。

⑤の部分にはかくて土塁状小丘(細長い平場)が約40mにわたって存在していたが、昭和59～60年の急傾斜地災害防止工事のため、そのほとんどが破壊され、わずかにその南端部分20mを残すのみとなった。この土塁状小丘南下に岩根稻荷大明神がある。

I郭の北東下には空堀を隔てて細長い土塁状小丘が位置する。I郭間との空堀は、I郭東下の平場へ続く。

#### 第II郭(70m×30m)

I郭の南東側に空堀を狭んで対峙する。郭上面は平坦で、現況は荒地となっている。上面のレベルはI郭より3m程高い。

西縁下4mの北側に細長い平場(東西8m×南北40m)がある。I・II郭間の空堀は幅23mII郭との比高は現状で5mを測る。北東端と南西端に一段低い平場があり、本来その部分まで掘り下げられていたものと思われる。天正19年の破却の時に埋められたものであろうか。

#### 第III郭(115m×115m)

本館の南東端に位置する。空堀、沢等により他の郭及び御休堂のある南東台地と載れているI郭と同程度の大きな郭である。郭上面はほぼ平坦で、畑地、果樹、樹林として利用されている。

北側には空堀が走り、北西部分にはIII郭上面への通路と考えられる階段状平場があり、空堀へと続く。さらにその西方には小沢、土塁状小丘、空堀、第I郭が続く。西側斜面5m下には幅65mの平場がみられる。また南西部下には本来、平場、空堀及び土塁があったが、宅地造成のためそのほとんどを消滅した。

III郭の南側には空堀を隔てて築山状小丘がある。この上面は平坦で、この小丘南下にも小さな平場がみられる。築山状小丘は長内。上ミ和志賀館等においてもみられ、物見台としての性格も考えられるが、本館の場合、この場所以上の展望のすぐれた場所があり、他の性格を有していたと考えられる。



#### 第Ⅳ郭 (20m×55m)

東端に位置する小さな郭である。南側に位置するⅢ郭とは空堀により、西側の台地とは沢、小溝(空堀?)により截られている。郭上面はほぼ平坦で、畑地、果樹園として利用されている。

#### 第Ⅴ郭 (35m×10m)

I郭の北側に位置する小さな郭である。郭上面はほぼ平坦で、北端に墓石と思われる石がある。この郭の南下方には存立期における通路と考えられるところがあり、この郭が通路を防備するための役割をもっていたものと推測される。また西から北方向にかけての展望にすぐれており、I郭防禦のための主要な郭であったものと考えられる。

#### 第Ⅵ郭 (100m×40m)

「タカ陣場」と通称されるⅥ郭は、沢を狭んでI郭の北東に位置する。三方を沢に囲まれ、北方の台地とは空堀により分断されている。郭中央付近には東西に走る幅7～8mの浅い溝状窪地がみられる。その北西付近に人為構築と考えられる地形が残っている。Ⅵ郭を2分する空堀等の痕跡であろうか。この部分を除く郭上面はほぼ平坦で、現況はりんご園となっている。

#### 第Ⅶ郭 (80m×45m)

Ⅶ郭は本館の北端に位置している。北から東端にかけてその北東台地より3m高い程度で、空堀、沢等により分断された痕跡を残していない。郭であったという伝承もなく、断定はできないが、数mの段差とは言え、北東の台地と不連続であるということ、主郭と考えられるI郭北側に隣接するという位置関係から、とりあえず郭として記述を進める。

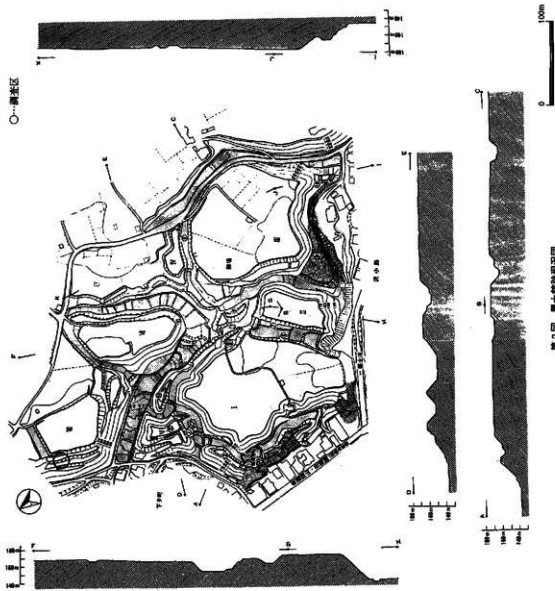
本郭上面は平坦で、現況は果樹園となっている。南西端は崖面が沢まで落ち、南側下には三段の帯状平場が設けられている。西側斜面にも帯状平場が二段構築されている。この平場は、陣場台北端にまで続いている。

#### 陣場台

黒土館の北側に延びる陣場台の東側上に花輪古館方面から台地北端にかけて、2～10m幅の帯状の平場が、2～5mの段差をもって数段構築されている。また西側斜面にもⅦ郭西下の平場から続く帯状の平場が構築されている。西側の平場は下方に行くにつれてその幅を広げ、低地まで続いている。

この陣場台の北端は、郭状の地形となっている。あまり大きいものではないが、周囲より一段高く、円形を呈している。その地形に立つと、北方の展望にすぐれ、柴内館、乳牛館、万谷野館等が一望できる。黒土館の範囲をここまでとするには無理があるが、この小丘を黒土館に関連する岩跡と考えることはできないだろうか。

黒土館は、長い期間をかけて、館主の勢力拡大、時代の情勢に連応して、拡張されたものであろう。館跡は、複雑な縄張りをもっており、記録には出てこないが、戦国期にも存立していたこ



第2区 属十红窑址及区



P L 1 黒土館跡全景（上空より）

とを示唆している。

黒土館の空堀は、空堀としての機能の他に掘底道として、各郭を連絡する通路でもあった。I・II郭間の堀も通路であったと推察される。また、今は急峻な断崖となっているI・II郭の南側にもこれらに通じる平場が存在したと思われる。

黒土館は天正19年(1591)に破却されたと記録があるが、I・II郭間の埋め立てられた空堀がその痕跡の一つであろう。

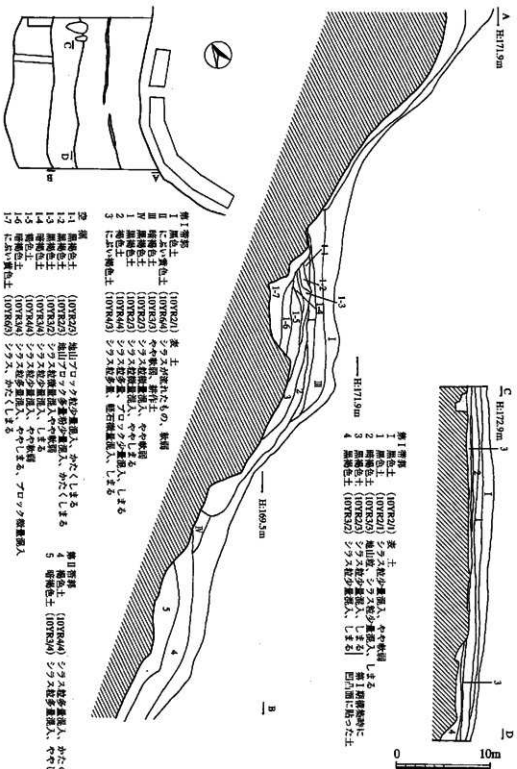
黒土館に近接する花輪館、花輪古館は開発により、落城寸前である。福士川の流れ及び近年の工事等により、黒土館の南側、西側の斜面の破壊の跡も生々しい。しかし黒土館は、一步中に踏み入ると遺構の残存状況は非常に良好である。今後、これ以上の破壊が進まないよう切望する。

(関 直)

#### 4. 遺跡の層序

遺跡の層序については第3図のとおりであるが、調査区中央部に設定したトレンチでは、郭上部の黒色土が大量に流れ落ちているのを確認した。その黒色土中には薄いすじ状の大湯浮石層がみられ、土器破片は大湯浮石層下の黒色土中から出土した。東側斜面のトレンチでは、土砂崩れ等により斜面の崩壊を確認、おそらく帯郭は館を巡っていたと思われる。

図 10 土層断面・図層材料 図 13 添



- 第1帯路
- 1 黒色土 (10YR2/1) 灰土 シラス粒少量混入、やや軟弱、しまる
  - 2 暗褐色土 (10YR3/9) 地山灰、シラス粒少量混入、しまる
  - 3 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 4 黒褐色土 (10YR3/2) シラス粒少量混入、しまる
- 第2帯路
- 1 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 2 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 3 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 4 暗褐色土 (10YR3/2) シラス粒少量混入、しまる

- 第1帯路
- 1 黒色土 (10YR2/1) 灰土 シラスが深れたもの、軟弱
  - 2 暗褐色土 (10YR3/9) やや軟弱、耕作土
  - 3 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 4 暗褐色土 (10YR3/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 5 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 6 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、しまる
  - 7 暗褐色土 (10YR3/2) シラス粒少量混入、しまる

- 第2帯路
- 1-1 暗褐色土 (10YR2/2) 地山アロワック粒少量混入、かたくなる
  - 1-2 暗褐色土 (10YR2/2) シラス粒少量混入、かたくなる
  - 1-3 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 1-4 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 1-5 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 1-6 暗褐色土 (10YR3/9) シラス粒少量混入、しまる
  - 1-7 暗褐色土 (10YR3/9) シラス、かたくなる

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査に至までの経過

秋田県鹿角土木事務所では、平成7年度より黒土館跡の北東部において複数年に渡る急傾斜地崩壊防止事業を計画し、秋田県教育庁文化課に発掘調査を依頼した。県文化課では多量の事業量を抱えていることから、鹿角市教育委員会へ発掘調査の打診があった。これを受けて3月下旬に三者の協議を行い、当教育委員会が調査・報告書作成を行なうことで合意した。

本調査は、これに伴う第2次発掘調査である。発掘調査委託契約を平成8年4月 日に締結し、調査は事業計画を考慮し、同年4月8日から開始することとした。

### 2. 調査要項

- 1 遺跡名 黒土館跡（鹿角市遺跡番号：306）
- 2 所在地 秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陣場ほか
- 3 調査目的 急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査
- 4 調査面積 400㎡
- 5 調査期間 発掘調査 平成8年4月8日～5月31日  
整理・報告書作成 平成9年2月7日～3月31日
- 6 事業主体者 鹿角土木事務所
- 7 調査主体者 鹿角市教育委員会
- 8 調査担当者 鹿角市教育委員会 生涯学習課  
主任 藤井安正  
主事 花海義人
- 9 調査参加者 調査指導員 武藤祐浩（秋田県教育庁文化課 学芸主事）  
調査員 安村二郎（鹿角市史編さん委員）  
調査補助員 柳沢和仁、大森寿子  
作業員 安保藤太郎、児玉秀春、佐藤一男、土井口敬三、間藤鐵三郎  
三浦茂雄、児玉喜代治、苗代沢ノブ、宮沢トミエ、柳沢勝江  
柳沢ヤス、柳沢恵美子、佐藤良子、木村千鶴江、柳館愛子  
黒川一子、児玉フテ、米村スミ、川又リサ、児玉サキ、  
高村サツ、木村ミツエ、兎沢サツ子  
田中栄子、石川久美子、福島美紀子、石川千春

- 10 生涯学習課 課長 田中正美  
課長補佐 奈良勝哉  
主査 秋元信夫  
主任 藤井安正  
主事 花海義人

11 調査協力機関、協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県出納局管財課  
花輪第一中学校、佐藤 樹、古川孝政、関 直

### 3. 調査の方法

調査区は、急傾斜地に位置することからグリッドの設定は困難であった。このことから、便宜的に帯郭を大きなグリッドと仮定した。

遺構確認面及び帯郭構築面までの表土・堆積土の除去は手掘りとし、抜根作業は、遺構の崩壊を最小限に留めるため人力とした。遺構については、上面で確認することに務め、確認順に番号を付した。遺物の取り上げは帯郭（上段よりⅠ帯郭～Ⅲ帯郭とした）・各層ごとに取り上げた。

遺構の実測については、平板測量によって、縮尺1/100で図化した。

写真撮影には、カメラ3台を使用し、作業の進行状況ごとにモノクロ、カラー、スライドフィルムに取めた。

### 4. 調査の経過

発掘調査は平成8年4月8日から開始し、5月31日に終了した。調査経過の概要は、次のとおりである。

4月8日、作業員への事務連絡、作業説明を行なう。なお、急傾斜地に植栽された杉の伐採が遅れ、調査開始日を同15日へ変更した。同日より24日までは、調査区内の杉枝の処理や抜根作業、土留槽の設営に全力を費やす。25日より、郭上面とⅠ～Ⅱ郭間の斜面土山露出作業を行なう。5月2日よりⅡ帯郭の平坦部の表土除去に取り掛かり、同9日には、館期Ⅱ～Ⅲ期の生活面、14日にはⅠ期の生活面での遺構確認を行なう。同16日には、Ⅰ郭の表土除去を開始し同22までに館期Ⅲ～Ⅰ期生活面での順次掘り下げ、遺構確認を行ない、随時、図面の作成を行なう。同23日には、Ⅰ郭で確認された空堀の精査を開始する。

同31日までに、遺構の精査、写真撮影を行い、現地での調査を終了した。

### 第三章 検出遺構と出土遺物

#### 1. 帯郭と検出遺構（第4～6図）

遺跡の層序や遺構の重複関係より、4期の構築時期が確認された。帯郭は、昨年度調査区より連続するものである。南東側斜面が崩壊しているため確認できなかったが、本来は郭全体に巡らされていたものと思われる。I帯郭で確認された空堀も同様のことがいえる。

なお、帯郭の名称は上段のものからI～III帯郭とし、各時期ごとに帯郭の構築時期の古い順に記述する。

（第1期）館跡構築初期のものである。斜面を削り、上段に幅150～600cmの帯郭（I帯郭）を下段には幅200～600cmの帯郭（II帯郭）を作り出している。I帯郭はシラス層を掘り、II帯郭はシラス層を若干掘り込み、盛土によって平地を作り出している。盛土に使用した土はI帯郭構築時のものを利用したと推測される。I帯郭斜面際には、幅50～100cmの細長い小平場が2段構築されている。また、I帯郭と平行して空堀が構築され、長さは200cm、幅200～380cm、深さは50～100cmを測る。

II帯郭は、第1～4期まで通して使用されている。

第1期にともなう遺物は出土しなかった。

（第2期）第1期のI帯郭空堀が埋め立てられ、斜面際の2段の小平場は残している。その他は第1期のものが引き続き使用されている。

本時期に伴う遺物は出土しなかった。

（第3期）I帯郭空堀は全て埋められ、斜面際の2段の小平場のうち下段までの面までが埋められる。

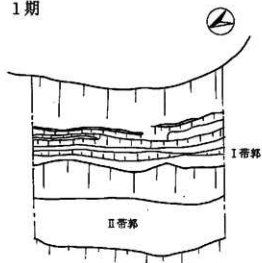
本時期に伴う遺物は出土しなかった。

（第4期）I帯郭の斜面際の小平場上段までを含め、第1期に構築された面は全て埋め立てられ、平坦な面を作り出し、さらに、調査地の西側斜面降り際に、不整楕円形の縦堀りが作り出されている。縦堀りは用途不明であるが遺構内の堆積土状況から水が流れたような痕跡が観察される。

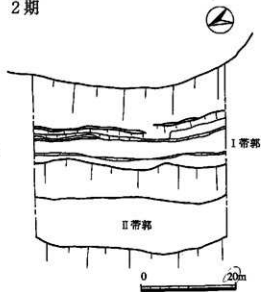
本時期に伴う遺物は出土しなかった。



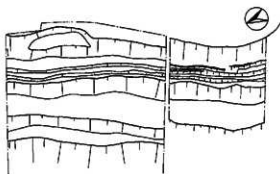
1期



2期

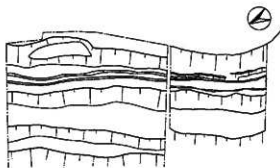


1期



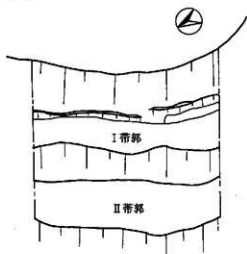
※昨年度の調査区と合わせたもの

2期

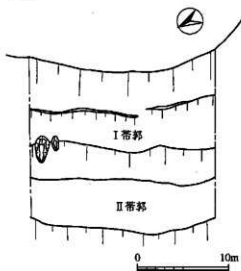


第4図 各期遺構配置図

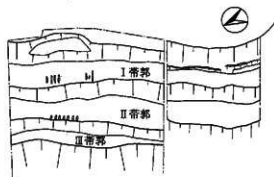
3期



4期

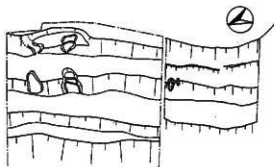


3期



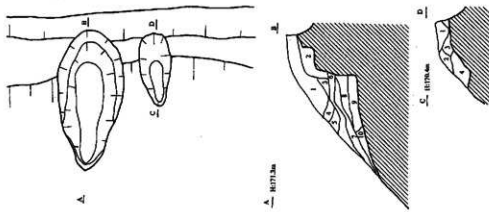
※昨年度の調査区と合わせたもの

4期



0 20m

第5図 各期遺構配置図



断面A

- 1 黒褐色土 (BFV K220) 中々しまる
- 2 黒褐色土 (BFV K220) 地肌、シラスブロック多数混入、しまる
- 3 黒褐色土 (BFV K220) 地肌、シラスブロック多数混入、中々粘質
- 4 黒褐色土 (BFV K220) 地肌、シラスブロック多数混入、粘質
- 5 黒褐色土 (BFV K220) 地肌、シラスブロック多数混入、粘質
- 6 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック多数混入、中々しまる
- 7 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック多数混入、中々粘質
- 8 におい(赤黄) (BFV K220) シラスブロック多数混入、しまる
- 9 におい(赤黄) (BFV K220) シラスブロック多数混入、黒褐色土少量混入、しまる
- 10 におい(赤黄) (BFV K220) シラスブロック多数混入、しまる

断面B

- 1 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック多数混入、中々粘質
- 2 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック多数混入、中々粘質
- 3 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック、粘土層混入、粘質
- 4 黒褐色土 (BFV K220) シラスブロック、粘土層混入、中々粘質

0 2m

第6図 I 帯郭縦掘平面・土層図

2. 出土遺物

調査地より縄文土器破片、陶磁器、石器、土製品、石製品、鉄製品、古銭が出土した。概要については以下のとおりである。

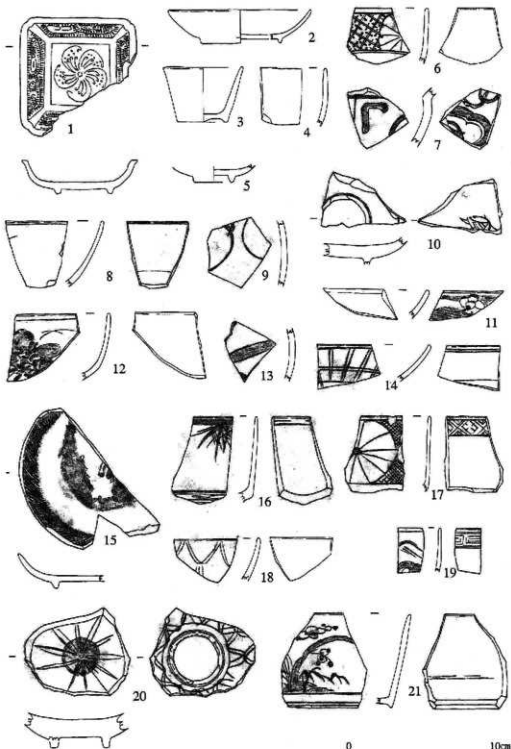
(1)陶磁器 (第7図、8図)

調査区より30点が出土した。20、24、25、27はI帯郭III期構築面、18はVI期構築面而出土した。1、3、5は肥前系白磁で、1は18～19世紀の角皿、3は19世紀のちょこ、5は18～19世紀の小皿である。2、4、6、13～23、26、29は肥前系の碗、皿、壺の破片で、18～19世紀のものである。6、17は網目文に花柄が特徴で内側にはたすき文が描かれ、この時期に特有のものである。18は二重の線で描かれる肥前系染付けで、18～19世紀のものである。20は長石釉の碗である。24は肥前・唐津系の鉄釉の碗で、8～12は肥前系の碗、皿、壺、とっくりの破片で17～18世紀のものである。28は唐津系の皿で17～18世紀のものである。

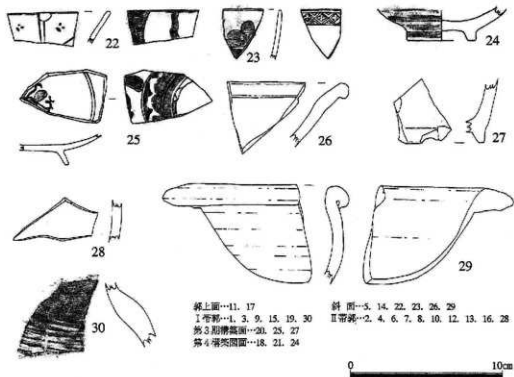
30は、珠洲の壺で、14～15世紀に作られたものである。また、7は17～18世紀中国産の染付け大皿で、25は17～18世紀前半中国(清代)産の染付け小皿の可能性が考えられるものである。25は脚部が外側に開いているのが特徴である。

(2)鉄製品・古銭 (第11図22～27)

調査区内より、クギ1点、刀子の先端部1点、鉄 35点、古銭5点が出土した。クギ、刀子



第7圖 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

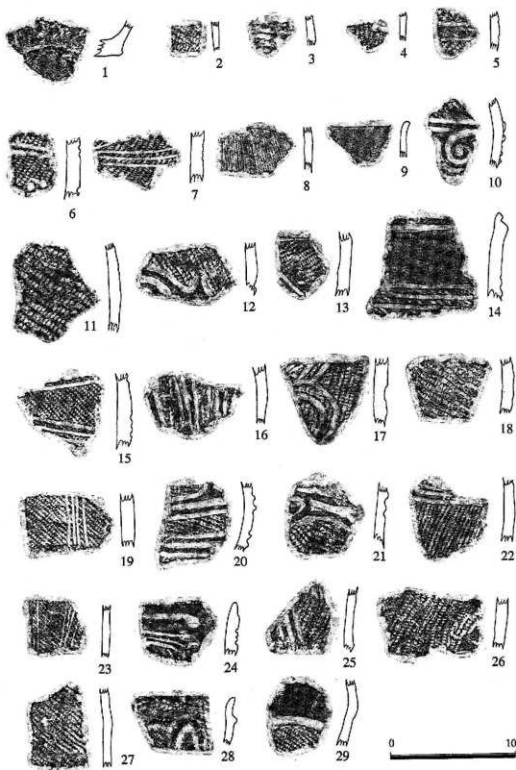
25点、古銭2点は第2期構築面より、鉄滓6点、古銭2点は第4期構築面より出土した。古銭は寛永通宝が2点で、淳化元寶1点がII帯郭で出土した。の寛永通宝は秋田市川尻産のものとと思われる。その他は破損、サビ等により判別不可能である

(3)縄文土器(第9図、10図)

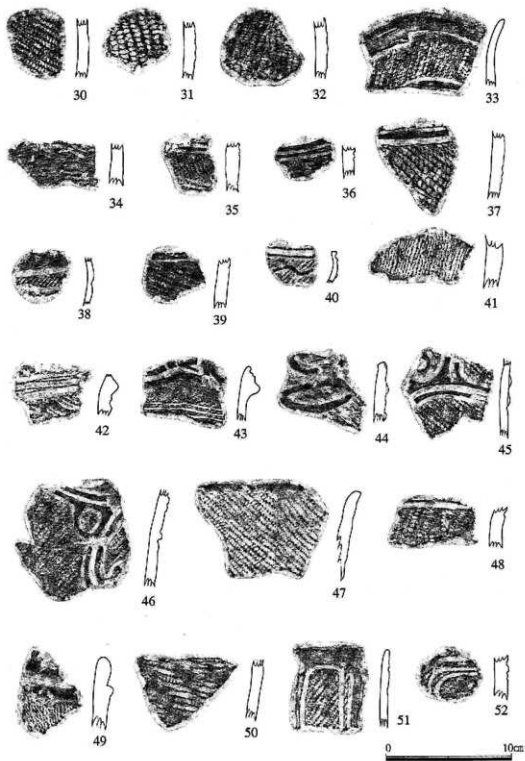
調査区遺構外より縄文時代中期中葉～末葉の大木系、円筒上層系の土器破片がコンテナ1箱分出土した。土器は本遺跡郭上面一帯に広がる天戸森遺跡から土砂と共に流れてきたものと思われる。特にトレンチ部分の大湯浮石層下の黒色土中より多量の土器破片が出土した。深鉢形土器が大半を占めている。地文としてLR、RL縄文が施紋され、隆帯や沈線によって胴部文様が描かれているものが多い。

(4)石器・土製品・石製品(第11図)

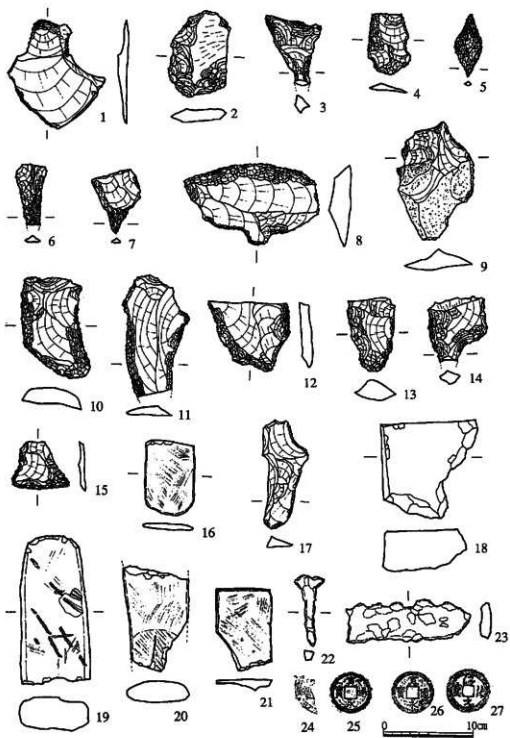
調査区内より、石鏃1点、石錐4点、搔器11点、磨製石斧2点、敲石1点、凹石10点、磨石4点、砥石2点、石斧型土製品1点、石刀1点が出土した。5は石鏃、3、6、7、14は石錐である。18、21は砥石で、17は石刀の破損品である。19は石斧を模した土製品で、表面にはLR縄文が施文されている。



第9図 出土遺物(3)

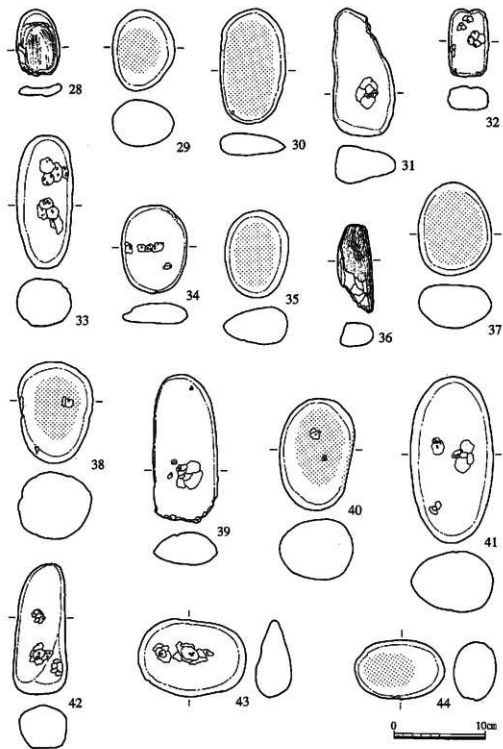


第10図 出土遺物(4)



第11圖 出土遺物 (5)





第12圖 出土遺物(6)

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

黒土館は、鹿角市花輪字陣場、字下夕町に所在する。館跡は、米代川の支流である福土川右岸に発達した舌状台地を空堀によって区切った7つの郭から構成される。館跡からは鹿角盆地や小坂の一部までが見渡せ立地条件としては良好である。

昨年度からの継続調査で、本年度は昨年度調査区より連続した2帯郭、空堀の他、縦掘2条2段構築の小平場が検出された。遺物では、陶磁器30点、鉄製品2点、鉄滓35点、古銭5点、土器破片コンテナ1箱、石器66点、土製品1点、石製品1点、剥片20点が出土した。

帯郭では4期の構築時期が確認され、特に第1期目では、急斜面の堅いシラス層を削り、平場を作り出し、そのうえに空堀をも構築している。現地点でも確認できるように、おそらく帯郭とこれと付随する空堀はⅦ郭の北西側斜面を取り囲むように巡り、そして、Ⅵ郭と区切る南西側空堀へと続くことが予想される。このように大規模な土木工事が行なわれていることから黒土館跡の中で、Ⅶ郭は重要な意味をもつものと考えられる。また、県内での館の発掘例は少ないが、このように郭に帯郭のような平場を作り出している形態は、隣接する大館・七ツ館等多くみられる。このことは、館の形態に共通性があったことを示唆する。また、『鹿角由来集』では、「鹿角四氏である安保、成田、奈良、秋元氏が、当時大館で勢力を奮っていた浅利氏に度々攻められ、永正から大永年間にかけて一時占領された」という言い伝えがあるとされているが、双方の館の構築方に鹿角（鹿角四氏）地方・大館地方（浅利氏等）どちらかの一方の影響があったのではないかと推測できる。

遺物的には本館の構築時期に直接関連する物は出土しなかったが、陶磁器では18～19世紀のものが多い。これは隣接する近世の花輪館跡に関連するものであろうか。また、14～15世紀の珠洲も出土し、鹿角市内では4点目である。古銭では寛永通宝の他、淳化元寶（北宋、990）が1点出土し、また、17世紀前半の中国産と考えられる陶磁器破片が出土している。陶磁器は、一般的に隣の津軽地方でよく見かける肥前系のものが多いようである。

このように、遺物は館の構築時期に直接結びつくものでないしろ、当時の鹿角地方の幅広い交易を物語っている。

黒土館に関しては、文献からみても不明な点が多い。昨年度と今年度を通して少しずつであるが黒土館がどのように構成され、それぞれの郭がどのような意味合いをもつのか、解明の糸口をつかみつつある。黒土館発掘調査は、来年度も継続される予定になっているため、より多くの資料を得ることを期待して、本報告書のまとめとする。

（花海 義人）

## 参考文献

- 東京大学東洋文化財研究所 【館址 東北地方における集落址の研究】  
東京大学出版社 1958年
- 青森県教育委員会 【中の平遺跡】 1975年
- 秋田県教育委員会 【秋田県の中世城館】 1981年  
【天戸森遺跡】  
【県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ】 1994年
- 鹿角市 【鹿角市史】 1982年
- 鹿角市教育委員会 【天戸森遺跡発掘調査報告書】  
【天戸森の土器 天戸森遺跡出土縄文土器図録】 1990年  
【鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書】 1986年  
【黒土館跡発掘調査報告書】 1996年  
【地蔵野館跡発掘調査報告書】 1993年  
【小枝指館跡発掘調査報告書】 1992年  
【花輪古館跡発掘調査報告書】 1994年
- 富樫泰時・安村二郎 【秋田県】『日本城跡大系 2』新人物往来社 1980年
- 安村二郎ほか 【鹿角地方の館跡 航空写真測量調査に関して】  
【よねしろ考古 4】よねしろ考古学研究会 1988年
- 村越 潔 【円筒土器文化】雄山閣 1974年
- 永井久美男 編 【中世の出土銭—出土銭の調査と分類】兵庫県埋蔵銭調査会  
1994年

# 報告書抄録

ふりがな		くらたてあと 黒土館跡						
書名		黒土館跡発掘調査報告書(2)						
副書名								
巻次								
シリーズ名		鹿角市文化財調査資料						
シリーズ番号		59						
編著者名		鹿角市教育委員会 生涯学習課 (藤井安正・花海義人)						
編集機関		鹿角市教育委員会						
所在地		〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1 TEL 0186-30-1111						
発行年月日		西暦1997年 3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
くらたてあと 黒土館跡	あきたけん かのし 秋田県鹿角市 はなわが 花輪字 した 下夕町 じんば 陣場ほか	05209	306	40度 11分 73秒	140度 47分 93秒	19960408 ～ 19960531	450	急傾斜崩 壊防止事 業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
黒土館跡	館跡	中世	帯郭 空堀 縦堀	3段 1条 2条	陶磁器 縄文土器(中期) 石器 石製品 土製品 鉄製品 古銭		黒土館跡は、「鹿角四十二館」のひとつで近世文書である「鹿角由来集」にその名が掲載されている。館主は黒土三郎と伝えられているが史料がきわめて少なく、出自・経過などはっきりとしない。調査は館跡の北端部であったが、館跡の構造を知ることが出来た。	



黒土館跡全景（昭和57年当時）



調査区全景

P L 2 黒土館跡全景・調査区全景



調査区全景 (4期)



VI郭全景 (NE→SW)



II帯郭



III・IV郭間の空撮 (E→W)



I帯郭土層



I・V郭間の空撮 (E→W)

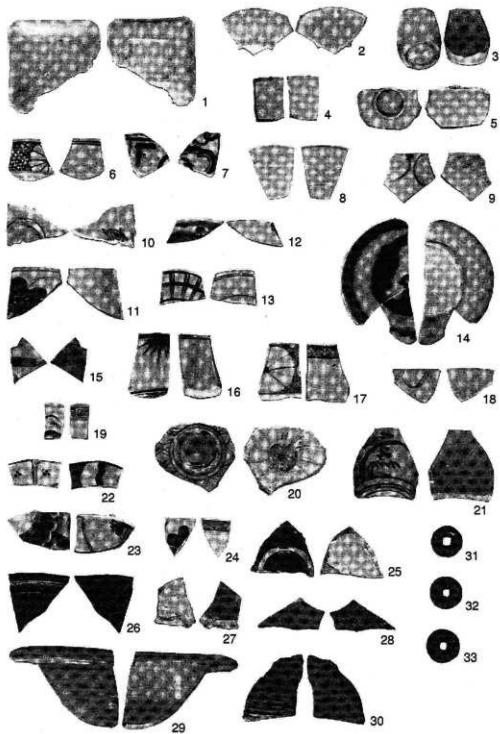


縦掘断面

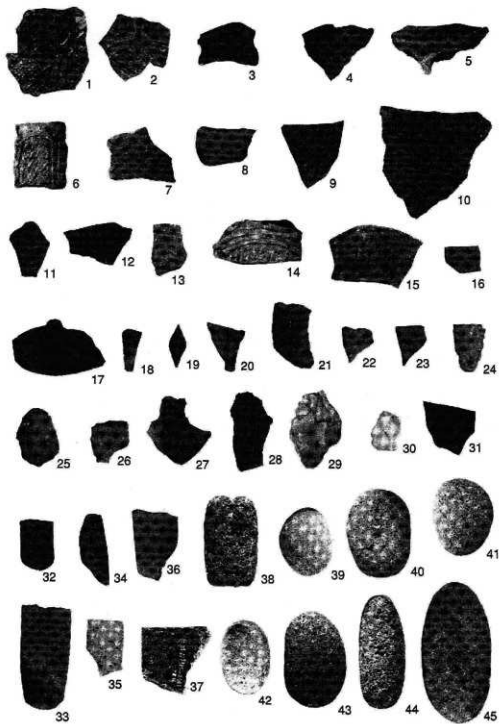


高瀬館跡を望む

P L 3 調査区全景



PL 4 出土遺物 (1)



PL 5 出土遺物 (2)



## 黒土館跡発掘調査報告書(2)

発行年月日 平成9年3月31日

発行者 鹿角市教育委員会  
〒018-52 秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1  
TEL 0186-30-1111 (代表)

印刷所 (資)石木田印刷所  
〒018-51 秋田県鹿角市八幡平字高見田50

---